

ジャワ農村の子供と初等教育 ——ヨグヤカルタ特別州内の農村調査から——

愛知学院大学

黒柳 晴夫

1. はじめに

周知のようにインドネシアは、大小250の異なった言語集団からなる複合民族国家である。しかも島嶼部の地勢的条件にもかかわらず、民族的・言語的・文化的紛争の絶えない多くの複合民族国家に比べてインドネシアは政治的・文化的統一性が比較的良好に保たれている。それは、インドネシアにはマレー系の人種に属し、マレー語を共通の祖語とする言語を話し、文化的基層を共通にした民族が多いからだといえよう。

しかし、建国以来「多様性の中の統一」が国是とされてきたように、インドネシアは「インドネシア人」や「インドネシア文化」の名の下に一元的に論ずることができないほど、民族的にも文化的にも複雑で多様な構成を示してきた。したがって、独立以来多様な民族の間にナショナル・アイデンティティを形成していくために、国民統合のための教育制度をいかに組織していくかが教育政策の大きな課題とされてきた。

ところで、インドネシアは、依然として農林漁業部門が全労働人口の半数以上を吸収し、国内総生産の寄与率が最も高い産業となっている。しかし1970年代以降、農業の近代化による食糧増産政策とともに、積極的な外資導入による近代的産業部門の開発政策が推し進められてきた。このような開発政策の推進によって、1970年代以降になると、近代化の担い手をいかに形成していくかが、教育政策の新たな課題として取り組まれてきた。

ところで、このような1970年代以降の開発政策の推進とそのための国民統合教育の再編・強化についての研究は、これまでややもすると国のレベルの政策や統計資料による分析にとどまり、そうした教育政策の下で実際にそれぞれの学校でどのような教育実

践をしてきたのか、またどのような教育課題に直面してきたのか、などの事例的な研究をほとんど試みてこなかった。

そこで本報告では、(1)現代ジャワ農村の子供の生活と発達段階、および(2)開発政策下の小学校教育の実態を、国民統合および近代化のための「開発された人間の育成」をめざした「パンチャシラ道徳教育」を中心に具体的な事例を紹介する。

さいわい報告者は、1989年4月より1年間インドネシア国立ガジャ・マダ大学で研究する機会をもち、その間9月より約5カ月間、インドネシア科学院(IIP1)の許可の下に、農家に滞在して農村の社会構造と教育環境について調査することができた。この報告は、そのときに得た資料に基づくものである。

2. 子供の生活と発達段階

人口圧力に悩むインドネシアが家族計画を重要な政策課題にしていることは周知のとおりである。しかし、従来ジャワ農村では、家族計画意識が希薄なうえに、子供が多いほど神の恩恵に浴して幸福になれると考えられ、一般に多子であった。現在でも子供をもつことへの関心は強く、子供も多い。

(1) 乳幼児期の子供

子供の一生は儀礼とともに始まる。すなわち、妊娠7カ月目の儀礼、出産・誕生の儀礼、臍の緒を切り・名付けをする5日目の儀礼、髪を切る35日目の儀礼、初めて土のうえに降りる7カ月目の儀礼、などが現在でも一般に行われている。いずれの場合も、夫方と妻方の親族と近隣の人々を招いて、スラマタン(selamatan)あるいはクンドゥリ(kenduri)と呼ばれる共食儀礼が行われる。これらの儀礼は、子供を悪霊から守護しようとする宗教的な動機に基づいている。それはまた、子供を親族や近隣の新た

な成員として承認する機会でもある。

乳幼児期の子供にとって、生活空間はもっぱら家族であり、他者との関係は母親との関係が中心を占める。また、幼児期を通じて、親は、ジャワ人としての基本的な行動様式を子供に習得させる。例えば、食べ物を手にするときには右手を用いること、排便の際には左手を使うこと、親をはじめ大人に対してできるだけ行儀よく、丁寧な言葉使いをすることなどである。

最近、農村部でも1、2年間幼稚園に通園する子供もみられるようになってきた。幼稚園は3歳からの3年制で、ほとんどが私立である。

(2) 児童期の子供

教育法によれば、国民は、6歳で初等教育を受ける権利をもち、7歳で初等教育に就学する義務を負い、6年間の課程を修了しなければならない、と定めている(14条)いる。したがって、子供は6-7歳の間に小学校に入学する。こうして児童期になると、子供の生活空間はにわかに広まり近隣の仲間集団、学校の仲間集団に加わるようになり縦の親子関係に加えて横の人間関係を経験するようになる。

この時期になると自尊心の発達とともに

恥ずかしさやはにかみなどの感情をもつようになり、その感情に訴えて家族内外の地位の序列に即した礼儀作法を教えられる。また、小守、掃除、水汲みなど家事労働の手伝いをするようになるが、子供の生活が男女によって分化するようになり、役割期待も性別によって分化するようになる。

結婚とともに重要な通過儀礼である割礼は、女子の場合は5、6歳頃に、また男子の場合は10-14歳頃に行われる。

3. 「パンチャシラ道徳教育」

パンチャシラは、文字どおり5つ(pancasila)の原則(sila)からなるインドネシア共和国の建国の基本理念を示したものである。

1965年の9.30事件によって発足した現在のスハルト(Soeharto 1921-)体制は、近代化を目指して経済現実路線をとり、経済開発の一環として教育改革に取り組み、近代化の担い手の育成、教育の質の向上、教育の機会均等の達成などの実現を図ってきた。その国民道徳形成のために、1974年より小・中・高の教育課程に「パンチャシラ道徳教育」が新設された(表参照)

ヨグヤカルタ特別州パントゥル県内で行った小学校の調査事例は発表時に報告する。

表 小学校教科別週あたり授業時間数

科 目	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
宗教	2	2	2	2	2	2	12
パンチャシラ道徳教育	2	2	2	2	2	2	12
民族闘争史教育 ¹⁾	1	1	1	1	1	1	6
インドネシア語 ²⁾	8/7	8/7	8/7	8/7	8/7	8/7	46/42
社会	—	—	2	3	3	3	11
算数	6	6	6	6	6	6	36
理科	2	2	3	4	4	4	19
保健・体育	2	2	3	3	3	3	16
芸術	2	2	3	4	4	4	19
技術	2	2	4	4	4	4	20
地方語 ³⁾	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(12)
計	26 (28)	26 (28)	33 (35)	36 (38)	36 (38)	36 (38)	193 (205)

(注) 1) 3学期に配当する。 2) 1,2学期は毎週8時間、3学期は7時間。

3) 地方語教科を取り入れている地方や学校で配当。

出典資料：教育文化省 Kurikulum Sekolah Dasar kelas GBPP,